神奈川県考古学会

考古かながわ 第35号

もう一度原点に戻って

近藤英夫
（東海大学文学部 教授）

現在、茅ヶ崎市の国指定史跡「旧相模川橋脚」の保存・整備事業が行われている。整備を担当しているのは茅ヶ崎市教委の方々である。筆者は、同市の文化財審議委員としてこの事業の末席に関わらせていただいている。事業の進捗を見守る中で、考古学の本来に触れる思いがした。それは何かというと、この事業を通して「残す」、「遺跡を次の世代に引き継ぐ」ということがいかに大切かということをあらためて実感した、ということである。

すでにご承知の方も多いと思うが、「旧相模川橋脚」について紹介する。旧相模川橋脚とは、1923（大正12）年の関東大震災のときに、水田から忽然とあらわれた杭9本のことである。沼田頼輔氏らの努力で保全され、1926（大正15）年に国史跡に指定された。保全の方法であるが、護岸をして池の中に橋脚を残すという方法をとってきた。

発見から80余年をへて、水面より上に突き出した橋杭の傷みがひどくなったのでそれに対処するため、今回、保存・整備を行うこととなった。市教委と文化庁は、この機会によりよい保存方法を検討するために池の水を掻い出し、現状確認の調査を行っている。

姿をあらわした旧橋脚（写真提供：茅ヶ崎市教育委員会）

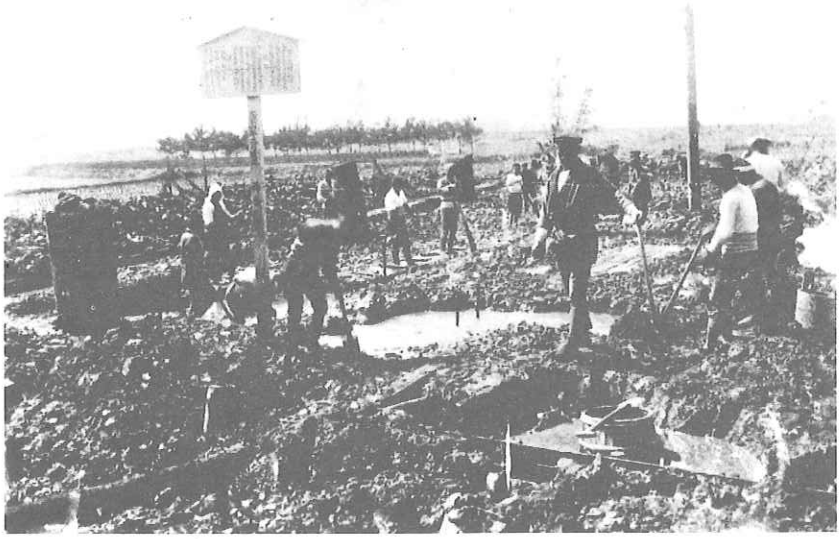
旧相模川橋脚が私たちに語りかけてくるものは大なるものがある。遺跡周辺には水田はもう全くなく、国道1号線が走り、そして建物群が林立しと、発見時の景観から大きく変わっている。それでも本物のもつ迫力は十分伝わってくる。

調査は2001（平成13）年から行なわれているが、今日まで、新たな橋杭の発見、旧川岸とその護岸のための板材の発見など、多くの成果をあげている。

さらに、橋杭の根元の地盤が崩れている箇所があり、そこを掘り下げたところ橋杭の土中の部分は鉛筆のように尖っていることがわかった。これは、掘り方をつくりそこに円柱形の杭をおくという通常のやり方とは全く異なっている工法である。砂地などに杭や柱を設置するときにとられた「揺り込み式」という工法ということである。この方法は中世までに途絶えた工法であり、近世以降は例がないという。また、橋脚が鎌倉時代のものという可能性が高いことが年輪年代測定や炭素14年代測定により言えるようになったこともこの調査の成果である。

このように、今日の考古学の手法で新事実が次々と明らかになっている。よくぞ残しておいてくれたものである、と先人の英知と努力に感動を覚える。

ちなみに沼田頼輔氏の業績と人となりは、坂本彰氏が『利根川』誌上で紹介し、歴史学・考古学の分野で活躍したのみならず、詩歌の分野でも活躍した、当時



整備作業風景（写真提供・茅ヶ崎市教育委員会）

一級の文化人であったことを明らかにしている（坂本2004）。坂本氏の紹介によれば、沼田氏は、史蹟名勝天然記念物委員として、旧相模川橋脚のみならず、山北の河村城、海老名の相模国府の史跡化に尽力とある。先人の行動力と慧眼に敬服する。

敬服すると同時に、自らを含めて考古学にかかわるものとして感じることも多々あった。「遺跡は有限の史産であり、考古学にかかわるものは遺跡を将来に引き継ぐために努力する」。考えてみれば、考古学の授業で一番はじめに習ったことを初老を迎えた今再確認したのであり、さらに私を含めて今日の考古学にかかわる者が、どれだけの遺跡を将来に引き継いでこれたかを考え忸怩たる思いもした。

繰り返しになるが、旧相模川橋脚整備事業にふれたことは、私にとっていわば原点回帰をせまるものであった。原点は二つある。一つは既に述べてきた考古学に携わるものとしての原点である。もう一つの原点は、行政がその責務において遺跡を残すということである。以下、後者について整理しておきたい。

こうした行政と文化財の関わりの原点がどこにあるのか、興味がでてきて探ってみた。調べてみると、西欧では19世紀末には文化財保護に対して行政が責務を持つという考えが出てきているということが判った。

19世紀末から20世紀初頭、英領インドの総督兼副王にW.カーズンという人がいた。はじめに断っておくが、彼は政治家であって研究者ではない。カーズンは1899年にベンガル・アジア協会という学会で講演し、「考古学の調査推進と遺跡の保護がイギリス政府のインドにおける行政の義務である」と述べている。そして彼の講演は、「発掘すること、発見すること、分類すること、写しをとること、記録をとること、解読すること、保全・保護すること、これは等しくわれわれの責務と考える」という言葉で締めくくられている。

今日に通ずる文化財行政の基本はまさにここにある。一世紀前にこんな演説をした政治家がいた。私はイギリスのインド支配を容認するものではないが、考古学にこうした理解を示す政治家がいたらいいなと思う。カーズンについて付け加えれば、後にインダス文明を発見し、世界史を大きく書き換える役割を果たしたJ.マーシャルをインド考古局の総裁に迎えたのも彼である。

カーズンは、本国イギリスですでに実行されていた文化財に対する考えを植民地に適用しようとしたと考えられる。彼は1904年に英領インドで「史跡保存法」の制定を行なう。これはアジアで最も早い文化財保護にかんする法律である。

わが国の「史蹟名勝天然記念物保護法」は、それより15年遅れて1919（大正8）年に制定されている。この法規はドイツに範をとったものとされており、イギリスの法規やカーズンの考えとは直接には結びつかない。しかし、19世紀末以来の西欧において生まれていた、行政が文化財保護の責務を負うべきという思想の流れの中にあることは確かである。

この思想をわれわれは十分に受け継いでいるか、行政は文化財を開発などの邪魔者と考えていないか、これもまた原点に戻ってもう一度考えておく必要がある問題である。

近年、ともすると発掘調査と保全・保護とを分離して考えるむきが行政の中で優勢になりつつある。少なくとも、これは考古学の側からの発想であるべきではない。カーズンの言葉を待つまでもなく、発掘と保全・保護は一体のものであるべきである。「発掘調査」、「遺跡・遺物の保護と管理」という2本の柱があってこそ、文化財保護

ができると私は考える。発掘調査というものは、文化財保護上ごく一部の行為に過ぎない。旧相模川橋脚が伝えているように、残しておくことで後の時代の人がさまざまなものを享受できる。やはり保存することは重要である。それにさらに「活用」というもう1本の柱が加われば言うことはない。私たちが文化財行政に期待するのは、この3本の柱の堅持である。

原点回帰から想いは行政への期待にまで広がってしまった。そろそろ拙文を収束させたい。最後にもう一度カーズンに戻るが、私が注目しているのは、彼の講演が学会でなされた点である。考古学の側からの発信だけでなく、外部から考古学へのさまざまな提案の受け皿としての学会、これも私たちが学び取るべきことのような気がする。県考古学会はぜひそういう場であって欲しい。

引用・参考文献
坂本彰 2004「湘南双歌譜―江ノ島の沼田頼輔歌碑をめぐって―」『利根川』26、32-40頁
Curzon, L., 1904 'On Archaeology in India', Archaeological Survey of India Annual Report,1902-03, Culcutta

(^o^) 見学会・考古学講座参加記 (^o^)

万田貝殻坂貝塚現地説明会見学記

安達香織

万田貝殻坂貝塚の現地説明会が、平成17年（2005年）12月10日（土）に行われた。平成17年8月1日から玉川文化財研究所が発掘調査していた、万田遺跡第9地点、「万田貝殻坂貝塚」の現地説明会である。平塚市教育委員会が主催し、10時半、11時半、14時半に解説があった。

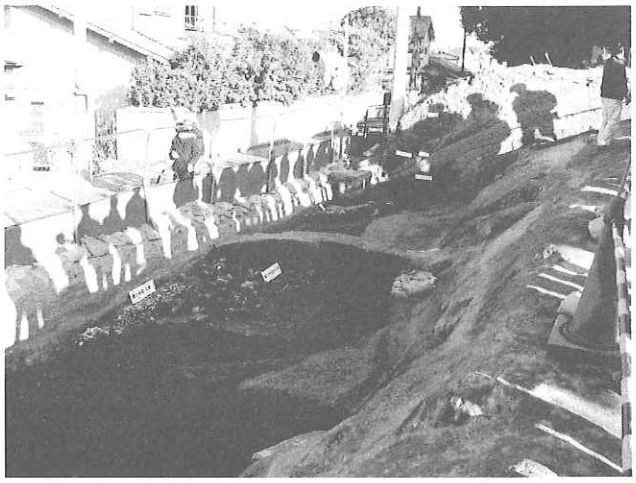
平塚駅から西に約4km、大磯丘陵の北端の斜面上に万田遺跡は位置する。縄文時代前期から後期（約7000年前～3250年前）の遺跡である。周辺の遺跡としては、同じく大磯丘陵上、北北西2.5kmに、縄文時代前期・中期（約7000年前～5500年前・5500年前～4500年前）が中心の五領ヶ台遺跡などがある。

万田遺跡は大正14年(1925年)に松村瞭・八幡一郎・甲野勇、さらに山崎直方・小金井良清・大山柏らによって調査され、人類学雑誌に報告された。古い時期の土器を含む貝層の上に多量の新しい時期の土器を含む層が堆積していることを示したこの報告は、堆積した層が下にあるほど上の層より古くなるという層位学の基本を考古学に取り入れ、土器型式に対応させた編年研究の基礎として有名である。

以降、土地開発などにより地形が変化し、大正14年に調査された万田遺跡内の貝塚、「万田貝殻坂貝塚」は、所在位置が不明確で削平されたとも考えられていた。平成12年になり、万田遺跡内の別地点での発掘調査の際に貝層が確認されたことをはじめに、今回の万田遺跡第9地点発掘では、大正14年に調査された貝層とほぼ同地点が確認された。

発掘調査が終了し、市営万田貝塚住宅が建替えられる前の記念すべき一般公開の日、3回目の解説の際に見学した。親子連れなど多くの方が参加されていて、人だかりで、はじめに説明をされた玉川文化財研究所の戸田哲也氏を見ることすらできないほどであった。見近にある遺跡の意義を理解することのできる、このような機会にたくさんの人が関心を示していることに感激した。

当日配布された資料には「万田貝殻坂貝塚の遺物出土状況平面図と大正14年の調査記録との比較」が掲載されている。発掘調査区西側の地層断面及び西から東に1～6に分けられたそれぞれの貝層を前に説明が



「万田貝殻坂貝塚」及び市道万田16号線

右から前期貝層及び遺物（前期土器・鹿角）

展示された貝塚内出土貝類

あった。遺構は検出されていない。貝層1付近は、中期と後期の土器が混ざり、時期を決めるのは困難であるとのことであった。貝層2～6は前期貝層で、調査範囲の北を横切る市道万田16号線の向こうと繋がるかどうか、とのことであった。

相原俊夫氏のご好意で、私は調査区内に入り出土状況を間近に見た。前期遺物包含層も市道万田16号線に向かって落ち込む斜面上に堆積している。急な斜面を転ばないよう下りながら、前期遺物の出土状況を見た。黒浜式などを含む前期貝層は調査区北端にあり、市道万田16号線の下に続いていることを予想させる貝層のひろがり方が特徴である。主体部分は市道万田16号線以北に現存していることが、土層の断面や貝層の広がり方から理解できる。

貝層ではハマグリ、ダンベイキシャゴ、カキなどが出土するとのことで、それらの貝の他、クジラの骨などの獣骨・魚骨、前期の黒浜式土器、中期の勝坂式土器、後期の堀之内式土器などの土器片、打製石斧や石皿・磨石・石錘・凹み石など石器・石製品、貝輪や骨角器などが展示されていた。遺物を前に多くの質問が飛び交った。

今回の発掘区域内の貝層1では前期と後期の遺物が混在していることから、貝塚としてはこの地域周辺の地形変動の影響を受けていると考えられる。万田貝殻坂貝塚の位置する大磯丘陵は地殻変動が激しい。地割れ・断層などは今回の地点内にも見られる。貝層1の時期の判定が困難であることの一因として挙げられる。

遺構が伴わず、集落がどこに立地していたのか不明であることも問題点である。万田遺跡付近には、平坦面が見当たらず、万田貝塚が形成された縄文前期の住居址は検出されていない。今後は同時期の大磯丘陵上西方の羽根尾貝塚、高座丘陵上の西方貝塚などとの比較研究が必要である。

貝塚の遺物取上げの直前の現地見学会に参加し、調査区内で観察することができた機会に感謝しつつ、これからもこのような説明会により多くの方が参加できるようにと願う。

（慶應義塾大学文学部民族学考古学専攻4年）

平成17年度 考古学講座『神奈川の城館跡』に参加して

東　真江

立春を迎えたとはいえ、まだまだ寒さの残る平成18年2月5日、横浜のかながわ県民センターで行われた『平成17年度 考古学講座 神奈川の城館跡』に参加した。このレポートを記したいと思う。

はじめに、神奈川県内には都市鎌倉や大城郭である小田原城など歴史的に著名な史蹟が存在し、中世史において極めて重要な役割を担った地域であり、近年の横浜市茅ヶ崎城や秦野市東田原中丸遺跡の発掘調査によって、県内の中世の城館研究がさらに充実されつつあるとの説明があった。講座は、これら近年の調査研究の成果として5遺跡の発表と、中央大学教授の前川要氏による、中世城郭研究の進展についての特別講演で

構成されていた。

霜出俊浩氏による「東田原中丸遺跡－中世の在地領主居館跡－」の発表では、秦野市内の市指定史跡源実朝公御首塚周辺には鎌倉時代に館となるような施設があったこと、御首塚南方遺跡では斜面地に大がかりな造成工事を行っており、建物群の主軸方向の違いと、遺物の年代が12世紀末と13世紀後半に分けられることから2つの時期にわたり居館が営まれたこと、御首塚西方の平坦地には数棟の掘立柱建物が所在したと考えられること、出土遺物から12世紀末から14世紀にわたる年代が与えられることが説明された。さらに、御首塚西方では鎌倉時代の遺構群とは別に、室町時代の溝で区画された方形区画の存在が示された。東田原中丸遺跡の周辺には水田が広がり、波多野氏ゆかりの寺院があることから「波多野庄」の中心施設があったと考えられ、今後は墓・社・道を明らかにすることで「波多野庄」の復元を試みたいとまとめられた。

齋木秀雄氏は「鎌倉の館と城－鎌倉城を中心に－」と題して発表された。12世紀後半に書かれた『玉葉集』において、「鎌倉城」とは周囲を尾根に囲まれた都市鎌倉全体を指すものと表現されており、極楽寺、大仏、化粧坂、亀ヶ谷、巨福呂坂、朝比奈、名越の「七切通し」が主要な通路であるとともに最終防衛戦であり、鎌倉時代、「鎌倉城」に「城郭」としての意識はなかった可能性を示唆された。大変興味深いのは、源義朝の「鎌倉の楯（館）」についてである。鎌倉の館は「亀谷の旧跡」から寿福寺辺りと考えられているが、寿福寺辺りの調査例はほとんどなく、現在鎌倉で最も古い遺構、遺物は鶴岡八幡宮境内の鎌倉国宝館用地であり、薬研堀の溝に囲まれていることが確認されている。これは奥州平泉の衣川にある「接待館」と同じ構造であり、「鎌倉の楯」は鶴岡八幡宮の下にある可能性を指摘された点である。

安藤洋一氏の「伊勢原の城館－丸山城跡を中心として－」の発表は、踏査と発掘による成果を合わせて中世城郭をみるもので、当時の景観を身近に感じられるものであった。丸山城は従来鎌倉時代初期の糟屋左衛門尉有季館（糟屋城）と称されてきたが、周辺の区画整理事業や宅地造成に伴う発掘調査により15世紀代の土塁、溝、堀などの遺構やかわらけや陶器（常滑系、瀬戸・美濃系、山茶碗窯系）の遺物が検出され、扇谷上杉氏の執事太田道灌の館である糟屋館（上杉館）である可能性が出て来たことを指摘された。

特別講演の前川要氏は中世という時代を「武士の時代」であり、同時に「流通の時代」として捉え、「中世城館の流れ－城館から城郭へ」と題してお話された。平安時代の末期に成立した館は当初は防御性が乏しかったが、時代とともに土塁や堀を備えるようになり、やがて室町時代に入ると館の中にいた家臣や商工業者は外に移り、戦国自体には城郭・城下が形成されるようになっていったという、館城から城郭への変化の流れを全国の事例を挙げて説明された。最後に考古学者に対し、発掘調査地点のみに拘らず、全体の理解を進めてほしいというお願いでまとめられた。具体例を多く挙げられた城の発展の流れはわかりやすく、普段あまり知る機会の少ない西国の例など大変興味深いものであった。

近藤英夫氏による「津久井城御屋敷跡の調査」の発

ミニ・シンポジウム風景

表は、神奈川県北部の津久井町と城山町にまたがる根小屋式山城である津久井城の城主館跡とされる「御屋敷跡」曲輪について、これまでの発掘調査概要が示された。「御屋敷跡」は、中世の後北条氏配下の内藤氏のときの古・新段階、近世豊臣氏によって落城して以降の改修期、江戸幕府の代官守屋・野村期の4時期に大きく区分されている。特徴的な遺構としてあげられた内藤期に築造される1号堀は、後北条氏と関係のある城に一般的に見られる障子堀ではなく、本城曲輪を背にして土塁とともに築かれている。これが何を防御するための施設なのか、城全体の性格とともに興味深かった。

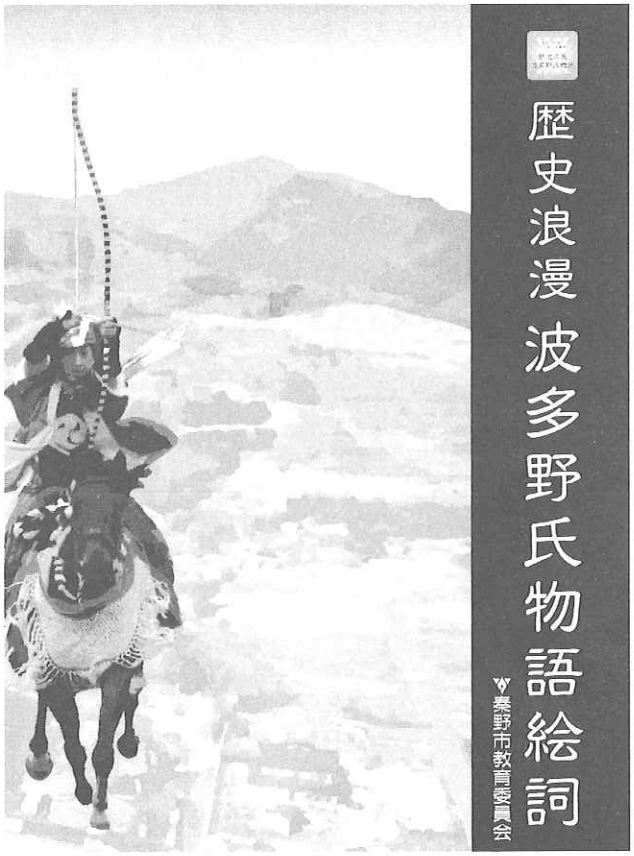
最後に「小田原城－戦国最大規模の城と城下の成立と変遷」について諏訪間順氏が発表された。15世紀前半には城として機能する施設が八幡山丘陵中腹にあったと想定されており、16世紀前半には後北条氏による整備が行われ、発掘の成果から、城下の整備は市場の整備とともに上水道（小田原用水）などの都市基盤整備として行われたと推察された。また本町遺跡第Ⅲ地点の調査から、戦国時代初期の堀は築造後間もなく埋め立てられ、別の土地利用がされていることがわかり、これまでの本丸・二の丸・三の丸・城下・総構えと小田原城の変遷と発展が考えられてきたが、これに堀・溝・道といった区画の存在を加味し、再構築する必要性を指摘された。小田原は現在も城下町として古い景観を見ることの出来る街であり、今後この町並みの中に中世の小田原城という歴史的景観の復元がどう進められるのか大変楽しみである。

発表を総括するシンポジウムでは、はじめに前川氏により城館と城郭の定義があり、溝による防御の有無が居館と屋敷を区別するとされた。この発言を受け、鎌倉では都市内部に防御施設はなく、それぞれが屋敷としてある状況が再度示された。東田原中丸遺跡でも鎌倉時代初期の遺構群に伴う堀や溝がないことが改めて確認された。二重の堀を持ち防御が堅い東北に対し、防御施設が希薄なこうした状況は、関東が比較的平和であったことを表わすとの考えも示された。また戦国期の城郭は城の中心部分が不明確で、郭の配置に強弱がないものが多く見られることから、殿と家臣が並列的な関係にあったことも指摘された。

こうした状況の中、丸山城は15～16世紀にはない機能性の高い城の造りになっており、近隣にある七沢城とともに位置づけに留意する必要があること、同時代の小田原城では畝状の堀が現われるが、津久井城では障子堀の有無などは不明であり、むしろ縦堀という甲斐の城に近い造り替えが内藤期になされていることなど、それぞれ城の特徴が比較された。山間部に位置する津久井城に対しては、16世紀半ばには全国的に城が山上に上がる傾向があり、中でも居館のハレ・オクの機能が山上に置かれることとの関連性についての指摘もあった。石川県の七尾城、岐阜県の岐阜城、福井県朝倉一乗谷、神奈川では小田原城などのクラスであれば町屋があり城の周りに総構えを持っていたことも示された。

シンポジウムの最後に、西国と東国の中世における土地制度の違いが示され、東国では15世紀までのヒエラルキーが壊され並列関係にあったとされた。小田原は畿内に対比しうる急進的な城下町の整備と総構えの構築をおこなっていることから、天文年間に画期があると前川氏によるまとめがあった。

今回、講座に参加し神奈川県内を越え、全国レベ



ルでの城の形成過程が個々の事例とともに示されたことで、身近な城館跡が歴史的にどのような意味を持つのか、その位置づけが自分なりにでき、大変勉強になった。改めて中世という時代の変換期を興味深く見直す契機となったと思う。

まとまりのない雑多な記述となってしまったが、最後に宣伝をさせて頂きたい。現在秦野市教育委員会では東田原中丸遺跡の調査を断続的に続けている。霜出氏の発表にもあった通り、この遺跡は周囲に波多野氏とのゆかりを示すものが多く残っている。より多くの方々にこれらの歴史を知って頂きたいと考え、昨年、市制施行50周年事業の一つとして『歴史浪漫波多野氏物語絵詞』を刊行した（左表紙写真）。秦野市教育委員会生涯学習課文化財班にて500円で頒布している。是非皆さんに絵詞を手に秦野を訪れて頂きたいとおもう。

（秦野市教育委員会 文化財班・博物館研究嘱託員）

(^.^) お知らせ (^.^)

『考古かながわ』原稿の募集

連絡誌も次号の原稿を募集中です。会主催の行事参加記や感想文、会へのご意見・ご要望に限らず、県内で開催された展示会や、聴講された講座の感想などもお寄せください。

次号は8月末刊行を予定しております。投稿をご希望の方は、7月中旬までにお気軽に下記へご相談ください。

問い合わせ：連絡誌担当　秋田かな子
東海大学校地内遺跡調査団内
0463-50-2419（直通）

『考古論叢 神奈河』原稿の募集

『考古論叢神奈河』は皆さまで育てる会誌です。会では第15集以降の原稿を募集しております。考古学会に衝撃を与えるような論文はもちろん、研究ノートや資料紹介も歓迎します。ふるってご投稿ください。

執筆を希望される方は、8月末日までに「執筆申込書」を会誌担当役員宛てにご提出ください。折り返し「執筆要項」をお送りしますので、要項にしたがってご執筆ください。原稿の締め切りは12月末日、刊行は2007年3月となります。

なお「執筆申込書」は、第14集の誌面中に掲載する予定ですが、今直ぐにでも第15集への執筆を希望される場合は、会誌担当役員あるいは下記の問い合わせ先にご連絡ください。

問い合わせ：会誌担当 滝沢晶子（株）博通 0467-25-6023

m(_ _)m お願い m(_ _)m

会費納入のお願い

同封のA4文書をご一読のうえ、郵便払込票により2006年度会費の納金をお願いいたします。

アンケートの実施について

今号の連絡誌では、同封の葉書でアンケートを行っています。3つの設問のほかに、会へのご意見欄が設けてあります。忌憚のないご意見や、そのほか何でもお書きください。

なお、アンケートの結果は2006年度総会の議案に反映いたします。回答集計の都合上、今号の連絡誌がお手元に届きましたなら、その週のうちに速やかにご投函くださいませ。ご協力のほどお願いいたします。

！神奈川県考古学会の今後の活動について！

2005年度の総会でも会員の皆さんにご報告をしたとおり、会の財政事情は非常に厳しい状況にあります。

毎年、会費収入約120万円と図書売上約50万円の合計170万円程度の収入を財源として活動をしています。これに対して事業の実施にともなう支出は、約210万円程度となっています。したがって単年度あたりでは差引40万円程度の赤字決算となっています。こうした状況は年度によっても異なり、2003年度は約48万円程度の赤字、2004年度は約24万円の黒字、そして残念ながら2005年度は約30万円程度の赤字決算となることが見込まれています。

現在のところは、会の設立以来からの繰越金が100万円程あるため、単年度あたりの赤字は繰越金によって補填することが出来ています。しかしながらこうした繰越金による差額の補填も赤字決算の年度が3年も続けば成し得なくなることは明らかです。

役員会では収入の拡大と支出の削減といった財政状況の健全化に取り組むとともに、本会の活動そのものについても見直しを検討してきました。その具体的な内容は下記のとおりです。

***

『考古論叢神奈河』をめぐって

○支出のうち会誌『考古論叢神奈河』の刊行に多額の経費がかかっている。

○会誌は隔年での刊行としてはどうか？

○せっかく会員への無料配布を始めたばかりなのに、隔年刊行では考古学会の看板がなくなるようなものだ。

○会誌は論文だけを掲載するのではなく、年報スタイルの部分を追加し、1冊で過去1年間の神奈川県内の考古学の動向がわかるような情報性の高い図書にしてはどうか？

『考古かながわ』をめぐって

○年3回発行している連絡誌『考古かながわ』は情報の新鮮さと速報性に欠けている。インターネット上にホームページを開設して、連絡誌の役割を担わせてはどうか？

○どの行事も開催案内を発送するための郵送料がかかり過ぎる。インターネットで行事の開催を知らせるようにすれば、郵送料も軽減できる。

各種行事の見直し

○講座は内容が難しいのではないか？

○現在の講座を中心にもっと魅力ある企画を考えシンポジウムを開催し、それにあわせて出版物を出せば図書の売上が伸びるのではないか？

○見学会は参加費が高い割りに魅力に欠けてはいないか？

○総会の出席率が悪い（低い）ので、遺跡発表会と統合して2部制で開催してはどうか？

○遺跡調査・研究発表会は会の設立以来からの基幹行事であり、開催時期が秋ということで定着している。総会と統合するなら会計年度の設定を変えなければならない。

***

以上は役員会での検討項目のほんの一部にすぎません。それぞれの提案・意見を検討だけで終わらせることなく、実現可能なものから順次、具体的に取り組んでゆきたいと役員一同考えています。

手始めに、今回の連絡誌送付にあたりアンケート葉書を同封いたしました。会員の皆さんから今後の活動・運営に関してたくさんのご意見をうかがいたいと考えております。特にインターネット上に県考古学会のホームページを開設することについて会員の皆様からご意見をうかがいたいと思います。事務局では会員のうち、どれくらいの方が日常的にインターネットをご利用になっているかさえ把握できていない状況にあります。今後、ホームページを開設した場合の効果を予測するとともに、皆様の賛同が多ければ早速その導入を2006年度の予算案に盛り込んで行くことといたします。皆様からの積極的なご意見、ご提案をお待ちしております！

（総務担当役員　小林康幸）

考古がながわ　第35号

発　行　神奈川県考古学会
発行日　2006年3月31日
編　集　秋田かな子・中川真人・渡辺 務（連絡誌担当）
印　刷　（有）湘南グッド
発行者　神奈川県考古学会　会長 寺田兼方
〒251-0043
藤沢市辻堂元町4-17-4 弥生荘102
郵便振替　00240-9-71208